

学位論文要旨

優位性の観点から見る「マア」

— 出現条件と音声的特徴に着目して —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 日本語教育学分野

学生番号 D174619 氏名 馮文彦

日本語会話では「アノ」や「マア」のような一見意味のない語がたびたび出現する。これらの語は「遊び言葉」「言い淀み」「無意味語」「場つなぎ語」など様々な名前と呼ばれてきたが、現在ではフィラーという名称で統一されている。フィラーはテキスト構成や対人関係に関わる重要なもので、「マア」はその中でも特に出現頻度の高いフィラーである（山根 2002）。しかし、自然会話における「マア」の使用実態の解明はいまだ十分とは言えない。先行研究の多くは、中心的意味（「曖昧性を示す」や「心内のわだかまりを示す」など）に注目しており、「マア」の用法（「マア」の使用できる場所、使用できる条件など）を自然会話の用例を使って検討した研究はほとんど見当たらないからである。さらに、「マア」の発音は一通りではなく、長さや高さにいくつかのパターンが見いだせるが、「マア」の音声を詳しく研究したもの、「マア」の発音と意味用法のかかわりを考察した研究もほとんど存在しない。このような現状を踏まえて、本研究は「マア」の出現条件と音声的特徴を明らかにすることを研究目的とした。（音声を問題としない場合「マア」と表記する。）

本研究の構成は以下の通りである。

第一章 序章

第二章 研究の背景

第三章 「マア」の出現条件の仮説

第四章 自然会話の用例からの検証

第五章 「マア」の音声

第六章 結論

第1章では、本研究での対象を規定した。先行研究では「マア」をフィラー、副詞などに分類することがあるが、フィラーと副詞を分ける統一的な基準はなく、分類基準が研究者によって異なるため、本研究では品詞の違いにこだわらず「マア」を広くとらえて分析対象とした。ただし、「あの店の料理はまあまあ美味しかった。」のような「まあまあ」は、程度副詞として用法が定着しているため、本研究の研究対象としない。さらに、「まあ、きれい。」のような感動詞用法の「マア」は、すでに辞書に記載されていることに加え、実際の会話ではほとんど使用されていないため、研究対象から除外した。

第2章では、先行研究を概観し研究課題を設定した。「マア」についての研究の多くが「マア」の意味を考察しており、「曖昧性」、「蓋然性」、「わだかまり」などの意味が提

案されている。提案された意味はいずれも母語話者の直観に沿ったもので一定の説得力が認められるが、「マア」の用法についての検討は十分とは言えない。

一方、「マア」の発音（長さやピッチ）にはいくつかのパターンがあり、発音による使い分けの可能性も想定されるが、「マア」の音声面についての研究も少ない。「マア」の発音の実態、さらに発音された形と意味用法の関係についても検討する必要があると考えられる。以上を踏まえて、本研究は以下の二つの研究課題を設定した。

研究課題（1） 「マア」の出現条件を明らかにする。

研究課題（2） 「マア」の音声（発音時間、ピッチ）の実態、「マア」の発音と意味用法の関係を明らかにする。

第3章では、主に作例を使って「マア」の使用条件を検討し、「マア」の出現条件についての仮説を提出した。

まず、「まあ」の使用には社会的関係による制限がある。

（1） まあ、そうですね。

この文を上位の者が下位の者に発する〈上位→下位〉の方向で使用しても問題ないが、〈下位→上位〉の方向に発すると無礼な印象を与えてしまう。この制限は「マア」に広く見られるもので、社会的立場によるこの使用条件を立場的優位性と名付けた。

（2） まあ、冗談だけど。

それ以前の自分の発言が冗談であることを伝える（2）には、「マア」を付けることが自然である。一方、「マア」にはなだめといわれる用法があり、例えば次がその例文となる。

（3） まあ、そんなに興奮しないで。

（2）と（3）は無関係のようにも見えるが、相手に見えていないものが見えており、その違いを感じながら発しているという点で共通している。（2）と（3）はやや特殊な例文だが、この用法が広く確認できるため、二つ目の出現条件として視点の優位性を立てた。

さらに、自分の体験や自分の家族などを語る際に「マア」がしばしば使われる。例えば、次は川田（2007）に引用された例文である。

（4）（父親は）かつての日本国有鉄道といういわゆる国鉄の、まー職員だったということもありまして。えー、まー、県内新潟県内ですけれど、ま、転居しました。

このように、体験や家族について語る際には「まあ」が現れやすい。この時、語り手は情報において圧倒的優位性があるため、これを情動的優位性と名付け、三つ目の出現条件とした。三つの出現条件は次のように整理できる。

- ・ 立場的優位性

立場的に上位の人は「マア」を使いやすいが、目上に対しては「マア」が使い難い。この背景として立場的優位性が指摘できる。

- ・ 視点の優位性

相手に見えていないものが見えており、その違いを感じつつ発話する時、話者には視点の優位性がある。

- ・ 情動的優位性

情動的優位性は話し手が相手の知らない情報を持つことで生じる優位性であり、典型は自分自身について語る自分語りの「マア」である。

いずれも優位性に関わることから、三つの条件を次のようにまとめて「マア」の出現条件についての仮説として提示した。

「マア」は話し手が立場的優位性、視点の優位性、情動的優位性のいずれかを感じる場所に出現する。

第4章では、自然会話と大学講義の用例を用いて仮説の有効性を検証した。本研究で使用する会話データは、学生同士の会話（9組×15分、合計約270分）、学生と教師の会話（9組×15分、合計約270分）及び大学講義（90分の文系講義×5本、合計約450分）を録音し、文字化したものである。検証の手順は次の通りである。

- ①自然会話と大学講義からランダムに例文を選び、例文に含まれる全ての「マア」が仮説に合致することを確認する。
- ②例文は、用法ではなく、「マア」と共起しやすい語彙や文法形式などを基準に選ぶ。
（共起しやすい語彙と文法形式は、先行研究で共起しやすいと指摘されたものを参考に、収集した資料を観察して選んだ。）
- ③「マア」と特に共起しやすい形式がある場合、その理由が出現仮説から説明できるかを考える。
- ④自然会話を使った検証を先に行い、次に大学講義の例文を使って検証する。
自然会話において「マア」と共起しやすい形式として以下の7つを選んだ。

- ・ 逆接形式
- ・ 順接
- ・ 挿入
- ・ 「思う」「考える」

- ・ 例示
- ・ あいづちでの使用
- ・ 笑いの前または後

各形式の内訳を整理して、下の表 1 と表 2 にまとめた。各形式は排他的な関係ではないため、合計の割合は 100%を超えている。

表 1 学生と教師の会話での「マア」の出現形式

	学生	教師
逆接形式	14 (42.4%)	59 (36.2%)
順接	0 (0.0%)	19 (11.7%)
挿入	2 (6.1%)	12 (7.4%)
「思う」「考える」	1 (3.0%)	5 (3.1%)
例示	0 (0.0%)	6 (3.7%)
あいづちでの使用	0 (0.0%)	1 (0.6%)
笑いの前または後	1 (3.0%)	13 (8.0%)
その他	16 (48.5%)	80 (49.1%)
「マア」の出現総数	33	163

表 2 学生同士の会話での「マア」の出現形式

	学生	友人
逆接形式	8 (22.9%)	15 (42.9%)
順接	5 (14.3%)	2 (6.3%)
挿入	1 (2.9%)	4 (12.5%)
「思う」「考える」	3 (8.6%)	2 (6.3%)
例示	0 (0.0%)	0 (0.0%)
あいづちでの使用	5 (14.3%)	4 (12.5%)
笑いの前または後	3 (8.6%)	4 (12.5%)
その他	12 (34.3%)	11 (34.4%)
「マア」の出現総数	35	32

表 1 を見ると、教師と学生の間で「マア」の出現数に大きな違いのあることが分かる。教師と学生の発話数はほぼ同じであるが、「マア」の数は、教師 163 に対して学生 33 であり、教師が学生の約 5 倍の「マア」を発している。この結果は立場的優位性の出現仮説と合致する。表 1、表 2 とは別に、学生と教師が自分を語る中で発した「マア」の数と割合を調べると、学生は 11 回 (33.3%)、教師では 56 回 (34.4%) が自分の体験を語る中に出現している。この数字は情動的優位性の出現仮説を支持すると言える。

三つの優位性の内、情動的優位性と立場的優位性は量的検証が可能だが、視点の優位性は文脈からしか判断できないため量的な検証が難しい。だが、表 1 と表 2 では、全ての発話者において逆接と共起する「マア」が突出して多くなっており、これが視点の優位性を量的に検証する有力な手がかりになる。修辞学では逆接形式について、対立する内容を複眼的に捉えた上で、対立を目立たせる形式と考える (Weaver, 1954)。つまり、複眼的視点と内容への自信 (目立たせようとする意思) の両方で、視点の優位性は逆接形式と重なると考えられる。そして、多くの例文ではこれが実行されている。

(5) (JT6 が教師, JS6 は学生。二人は学校の施設について話している。)

JS6 でもこの大学はほんとに、なんか設備はどんどんどん整えて、てる(ママ)じゃないですか。

JT6 まあでもあのう学芸もできたし、学生は、増えてますよね。

JT6 は JS6 に対する反論であり、JS6 にはなかった根拠が示されている。学生の気づいていない根拠を出している点に視点の優位性を指摘することができ、同時に、自分の見解に対する自信が「でも」という逆接形式によって示されている。逆接と「マア」の共起する例文の多くで、このように視点の優位性に支えられた自信を見出すことができる。逆接形式と「マア」の共起頻度が突出して高い事実によって、視点の優位性についてもかなりの程度妥当性が検証できたと考えている。

大学講義でも自然会話とほぼ同じ条件で「マア」と共起する形式を調査した。仮説の確認がしやすいように、表 3 では「過去の体験との共起」を加えている。なお、独話のためあいづちは見られない。

表3 大学講義での「マア」の出現しやすい場所

	講義 A	講義 B	講義 C	講義 D	講義 E	講義 F
逆接形式	0(0.0%)	32(18.2%)	20(19.6%)	25(27.8%)	9(45.0%)	19(30.6%)
順接	0(0.0%)	15(8.5%)	11(10.8%)	13(14.4%)	1(5.0%)	3(4.8%)
挿入	0(0.0%)	11(6.3%)	10(9.8%)	23(25.6%)	1(5.0%)	2(3.2%)
「思う」	1(12.5%)	16(9.1%)	14(13.7%)	7(7.8%)	4(20.0%)	5(8.1%)
例示	0(0.0%)	4(2.3%)	3(2.9%)	4(4.4%)	0(0.0%)	4(6.5%)
過去の体験	4(50.0%)	40(23.7%)	29(28.4%)	47(52.2%)	6(30.0%)	8(12.9%)
笑い	1(12.5%)	4(2.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(5.0%)	0(0.0%)
その他	3(37.5%)	78(44.3%)	38(37.3%)	20(22.2%)	7(35.0%)	25(40.3%)
出現総数	8	176	102	90	20	62

大学講義の第一の特徴は「マア」が多いことである。講義 A のような「マア」が極めて少ない講義があるものの、収集した6つの大学講義における「マア」の1分あたりの平均出現頻度は<1.21回/分>であり(授業中動画や録音を流すなど発話のない時間を除く)、最も出現頻度の高い講義 B は<1.96回/分>に達する。それに対し、学生同士の会話での「マア」の出現頻度は<0.50回/分>、教師と学生の会話では<1.45回/分>である。大学講義は情報と立場の両方で教師が優位にあるため、「マア」の頻度が高いと考えられる。

講義の「マア」では出現数に個人差があるが、出現しやすい場所はある程度共通している。最も頻度の高いのは過去の体験を述べる時、次が逆接と共起する時であり、この二つは自然会話と同様の傾向である。自然会話と異なるのは「その他」の割合の高いことである。「その他」に分類された中には、補足説明、言い換え、発話内容のまとめなどが多い。これらは講義内容をメタ的な視点から見て必要な補足を加えるものであり、その背景に視点の優位性を認めることができる。

自然会話と大学講義ともに、「マア」の現れやすい場所が立場的優位性、視点の優位性、情動的優位性のいずれかにつながっており、この事実は、仮説の妥当性を主張する有力な根拠となるだろう。

第5章では、音声的側面から「マア」を検討し、「マア」の音声的特徴及び、音声的特徴と用法の関係を明らかにした。「マア」の発音は様々であるが、延伸を伴う「まあ」と延伸

しない「ま」に区別できる。そして、文字起こしした資料を見ていくと、延伸を伴う「まあ」と延伸しない「ま」の間には、何らかの使い分けが存在することが予想される。第5章では、次の二つを検討した。

1) 「マア」の発音を Praat を使って客観的に把握する。Praat を使うことで発音の長さとお高さの変化（ピッチ）を正確に把握することができる。

2) 音声的特徴による「マア」の使い分けが存在するか。存在するとすれば、その使い分けはどのようなものかを明らかにする。

分析は、延伸を伴う「マア」、次に延伸を伴わない「マア」の順で行った。用例の選択では、偏りが生じないよう教師と学生の両方の発話から選び、さらに、共起する文法形式、用法などでも偏りが生じないよう注意した。

「マア」の音声的特徴については次のような結果が得られた。延伸を伴う「マア」のピッチがほぼ同じ形であるが、延伸を伴わない「マア」はピッチが下がる形と下がらない形があり、「マア」は音声的特徴から三つに分類される。

●延伸を伴う「まあ」（以下「まあ」と表記）

本研究で収集した延伸を伴う 256 例の「まあ」は、ピッチはやや平板となってから下降となり、発音時間は 200ms 以上となっている。（最も長いものは 441ms に達している。）なお、発音の長さは個人差があるが、ピッチのパターンが同じであるため、一つにまとめられると判断した。

●延伸せずピッチが下がる「まあ」（255 例で、発音時間は 150ms 前後）（以下「まあ」と表記）

●延伸せずピッチが下がらない「ま」（92 例で、発音時間は 100ms 前後）（以下「ま」と表記）

さらに、音声的特徴による使い分けの有無を調査したところ、三つの形がそれぞれ使い分けられていることが明らかになった。

「まあ」

- ・会話の流れの中で重要性の高い箇所の最初に現れることが多い。複文の場合、主節に現れる。
- ・あいづちに使われる。

「ま」

- ・背景情報を提示する部分に現れることが多い。複文の場合、従属節に現れる。
- ・あいづちに使われない。

「まあ」

- ・「まあ」が出現する場所、「ま」が出現する場所の両方に現れる。
- ・あいづちには現れない。

一言で言えば主張の強さによって「まあ」と「ま」が対立し、「まあ」は対立から離れたニュートラルな位置にある。3つの「マア」の共起形式を表4、表5に示す。

表4 三つの「マア」と出現場所の関係（学生と教師の会話）

	学生			教師		
	ま	まあ	まあ	ま	まあ	まあ
逆接	7	4	3	4	16	39
順接	0	0	0	0	7	12
挿入	2	0	0	4	3	5
思う	1	0	0	0	2	3
例示	0	0	0	0	2	4
あいづち	0	0	0	0	0	1
笑い	1	0	0	0	4	9
その他	3	5	8	7	16	38
出現総数	13	9	11	11	47	105

表5 三つの「マア」と出現場所の関係（学生同士の会話）

	学生			友人		
	ま	まあ	まあ	ま	まあ	まあ
逆接	3	2	3	3	7	5
順接	1	2	2	1	1	0
挿入	1	0	0	2	1	1
思う	1	0	2	0	1	1
例示	0	0	0	0	0	0
あいづち	0	0	5	0	0	4
笑い	1	0	2	0	2	2
その他	1	6	7	3	2	4
出現総数	7	10	18	6	11	15

引用文献

川田拓也 (2007) 「日本語談話における「マア」の役割と機能について」, 『言語学と日本語教育』 V, pp.175-192.

大工原勇人 (2010) 「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究:フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて」, 神戸大学博士学位論文

山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』, くろしお出版.

R. M. Weaver. (1953). *The Ethics of Rhetoric*. Davis : Hermagoras Press, p137.